

2. Consequences of Spread (重篤度の推定)

Mortality Level (旧)		Consequence of Spread (新)	
Score	Criteria	Score	Criteria
2	> 10%	4	重症かつ死亡率が高い
1	1-10%		
0	0.1 - 1%	3	重症であるが死亡率は低い
-1	< 0.1%		
-2	死亡率ゼロ	2	中程度の重篤度だが死亡例なし
		1	臨床的には軽度
-3	臨床例なし	0	臨床例なし

3. Probability of Entry (侵入する確率)

0.8 国内へ侵入する確率が非常に高い

0.6 中程度に高い

0.4 侵入する確率は非常に低い

0.2 侵入する確率はほとんどない

最後に、Mckenzie 氏を招へいた意義について述べる。具体的には、2つの成果があった。ひとつは、吉川らの方法の評価と、客観的に疾病のランク付けが可能となる変法を生み出したことである。順位付けは完了していないが、OIEの基準にも沿える結果が期待できる。もうひとつは、学術セミ

ナーを2大学で開催したことで、野生動物由来疾病のヒトへ与えるリスクについて、微生物学的情報だけではなく、疫学やリスク分析の面からも、学生や研究者の意識を高めることができたことである。資金を提供してくださったヒューマンサイエンス新興財団に深謝する。

体験学習とダイアログ

－体験学習のワークショップとしてデザインした、
あるプロジェクトのキックオフ・ミーティングを事例として－

水野 節子（有限会社クリシェ）

私たちは、自分たちがそもそも何者であるのか、あるいはシステムのどこに位置しているのかによって、それぞれ違うものを見ているのです。その事実を尊重しなければ、どうして正確な全体像を描くことができるのでしょうか？多くの異なる視点を持つことによってのみ、私たちは良い意思決定をするために十分な情報を手にすることができます。そして私たちは、みんなが異なる観点を探求することによって、お互いにより近づくことができます。

マーガレット・J・ウィートリー（2005）

どれだけ豊富な知識を持ち、優れた能力を持つ人でも、一人でできることには限りがある。現代では、固定したメンバーで仕事を行う機会以上に、案件ごとにふさわしいメンバーが集まってコラボレートし、課題達成や課題解決に取り組むプロジェクト形式の仕事が増えている。前出の M.J.ウィートリーの言葉の通り、そうしたプロジェクトではメンバー各自が自分の立ち位置と役割を自覚し、たとえ全員が同じ課題や情報、出来事に遭遇しても、それぞれの背景の違いから異なる見方をし、異なる意見を持つことが多いという事実を認識する必要がある。そして、そうした多様性を尊重し、十分にお互いの意見を交換して理解を深めることから、初めて集合的な創発が生まれることを念頭においておきたい。

本稿は、このようにメンバーの多様性を活かす視点とより良い連携・協力関係のもと、創発的な対話ができる関係づくりを目指して、国家的な必要性から結成されたある分野の課題解決に挑む専門家によるプロジェクトのキックオフ・ミーティングを、ラボラトリー方式による体験学習のワークショップとしてデザインし、ラボラトリー（今ここ）でのダイアログから多様性を活かした関係構築を試みた事例の報告である。

1. 具体的事例の概略

ラボラトリー方式による体験学習（以下、体験学習と略して表記）は、現在、多くの学校教育現場や環境教育現場等で、学習方法のひとつとして活用されている。これは、体験学習がもたらす「学習者中心の教育」の可能性に、多くの教育者が注目しているからである。既に述べたように、人間はそれぞれ異なる関心、見方を持っており、一様に同じ講義を聞いてもその受け取り方は、個々に違う。体験学習はそうした人それぞれに違いがあること

からスタートしており、同時に同じ体験をした当事者がお互いの感じたこと、気づいたことを手がかりに、自分たちが体験したことについて話し合っていくと、自分一人では見えなかったことがわかり、気づきや発見が生まれて、自分たちの行動や態度を見直すヒントが得られるという学習方法である。つまり、それは個々に異なる気づきであり、自分、もしくはグループに適した行動変容（改善）のための学びが人それぞれに得られるのである。そして個別具体的な学びが生まれる段階まで話し合いが進展すると、そのグループ自体が発達し、感じたこと、気づいたことが言いやすい雰囲気が生まれる。これはロジャース（1969）の言う「自己主導的な学習と解放的な風土が存在する」瞬間であり、そこでは個人の、そしてグループの可能性が解放される。筆者は体験学習のそうした学習手法としての有効性と可能性を、本プロジェクトの支援に活かしたいと思い、今回のワークショップを企画した。

a) プロジェクトの概要

国内最高峰の研究者による、ある分野の研究プロジェクト（研究班）である。省庁の要請により発足したプロジェクトであり、研究費は税金から支給されるため、研究の推進とともに社会・行政への対応、必要な場合は法律化も含めて、懸案事項（＝課題）についての適切な介入や管理体制の構築が求められている。先期3年間の活動を終えて、再び次期メンバーとして選抜された研究者と、新たに選抜された研究者が混在しており、メンバー（班員）は全14名。沖縄から北海道まで、幅広いエリアにメンバーは分散しており、相互に面識のないメンバーも多い。メンバーそれぞれが専門分野の第一人者である。

b) プロジェクト変革の展望

先期までのプロジェクトは研究会以外に対話の場を持ったことはなく、こうした試みは今回が初めてだった。そこで、筆者は今回の試みを行うことによる影響として、次のようなプロジェクト変革の展望を持っていた。

今までのプロジェクト（研究班）	→	今回のプロジェクト（研究班）
研究の全体像は班長が把握し、班員に指示		全員が課題に意見し、研究の全体像を把握
班員は依頼された仕事を間違いなく遂行		班員は担当外のことも、自由に意見・指摘
班員は班長の話をよく聞き、仕事の調整を図る		全員がお互いの話をよく聞き、意思決定に参加

c) ワークショップの概要

上記のようなプロジェクト活動の始動にあたり、プロジェクト経験の格差や専門性の違いを超えて、メンバーが主体的に研究に取り組み、前述したように多様性を活かす視点を持って、創発的な対話ができる関係づくりを促進するため、プロジェクトのキックオフとして体験学習を用いたワークショップを開催することを提案した。メンバーの中にプロジェクトの課題に関連した参加型研究活動の推進者がおり、その方が今回のキックオフ・ミーティングを思い立った経緯もあって、プランニング・実施段階を通じて、内部のチェンジエージェントとして機能してくださった。ワークショップの参加者はプロジェクトメンバ

一総勢14名と顧問1名、オブザーバー1名、補佐・記録担当者1名の全17名で、顧問、オブザーバー、補佐・記録の3名も実際には見学・観察にまわることなく、プロジェクトメンバーと同様にグループに入り、プログラムを体験した。

d) ワークショップのねらい

メンバーの主体的な取り組みは、ラボラトリー（今ここ）での実習やダイアログを通じて、自然に喚起されるものと考えていたので、「多様性を活かす視点を持ち、創発的な対話ができる関係づくりを促進する」というワークショップの目指す方向性を体現するために、必要な行動と態度をわかりやすく、次のような「ねらい」にまとめた。

○対話を通じて、お互いの世界を広げる

○一人ひとりの意見、存在を大切にする

e) ワークショップのプログラム

10:00

1. 多様性をもつ研究者からなる研究班の課題 -過去3年間をふりかえって-
2. 人間関係トレーニング
 - 2-1. 情報紙を使った問題解決実習を実施 ふりかえり／わかちあい
 - 2-2. 小講義「創造的な活動のために必要な視点」

12:00

昼食・休憩

13:00

3. ミニ講習会
 - 3-1. 過去3年間の研究成果の発表と質疑応答
 - 3-2. 海外での参加型研究活動の紹介と質疑応答

13:40

3-3. テーブルダイアログ

- 問い1：これまでの話の中で、あなたが最も価値を感じたり、必要と認めたところはどうなところですか？
- 問い2：これまで聴いてきたことは、あなたにとってどんな意味をもちますか？各自のこれまでの研究内容との関係を踏まえ、具体的に述べてください。
- 問い3：リスク評価指標に付け加えたいことや変更したいことを提案してください。

14:45

休憩

15:00

- 3-4. 全体ダイアログ
～各テーブルのダイアログ内容の発表と思い・気づきの共有

16:00

休憩

16:15

4. 本日の活動をふりかえって ふりかえり／わかちあい
5. 研究の「これから」に向けて

17:00

f) ワークショップのルール

プログラム全体を通じて、参加者全員にラボラトリー（今ここ）で守ってもらうグラウンドルールとして、次の内容を伝えた。

1. 人の話をよくきこう
2. 正直に率直に話そう
3. 人を非難するのはやめよう

4. 失敗を恐れず、何事にもチャレンジしよう 5. 楽しみながら参加しよう

安心して参加できる安全な場で、参加者が思いのままに発言し行動できるように、こうしたルールを用意した。

2. 人間関係トレーニング（ラボラトリー方式の体験学習）

a) プログラムの内容

1-a)プロジェクトの概要で述べた通り、メンバー間の関係は希薄な状態であったこと、またプロジェクトリーダー（班長）から「話し合いといっても、発言がないかもしれない」という情報を事前に得ていたことから、午前中は場の雰囲気のを和らげ、参加しやすい雰囲気をつくるために、「人間関係トレーニング」という呼称のもと、実習を用いたラボラトリー方式の体験学習を行った。実習は必ず全員が発言しなければ正解を導けない、情報紙を用いた問題解決型の実習を選び、発言することへのハードルを下げた。情報紙を用いた実習は、誰もが参加しやすいうえに、多様なメンバーが集まって仕事をするとどのようなことなのかを、体験的に理解するためにも役立つ。そして、ワークショップ全体のねらいを踏まえて、実習のねらいはその第一段階として、「メンバーとしての自分に気づく／お互いの良さを活かしあう」と設定した。

ワークショップ当日は事前に聞いていた情報に反して、アイスブレイクの段階からメンバーの参加度が高く、情報紙を用いた実習を行ったときは各グループとも真剣に取り組み、前向きに楽しく問題解決を目指す様子が見受けられた。これはうれしい誤算だった。筆者はそうした様子を見て、アイスブレイクの後には人間関係を観る二つの視点である「コンテンツ（課題・内容）とプロセス（人と人との関係的過程）」の小講義を行い、実習の際にはこれらの視点を意識することを示唆した。そのせいか、実習後のふりかえり用紙記入の際も、ていねいに記述している方が何人かいて、わかちあいになると記述は簡単に済ませた方も含めて、課題解決に向けて行動した自分のありよう、グループのありようを多くの人が具体的に語っていた。その後、「創造的な活動のために必要な視点」というテーマのもと、グループ内でお互いに影響を与え合いながら、解答を導いていった過程を例に挙げて、「集合知の創造」が起きる過程に、どのようなことがあるのかを話し、それが起こりやすい関係性を築くためには、異質な他者の存在を認めることが重要だという小講義を行った。

アイスブレイクや実習の体験を経て、それを踏まえた小講義を行うことにより、創発的な関係性を構築するために必要な行動・態度について、一方的な説明・説得ではない形で話すことができ、参加者はメモをとるなどして熱心にきいてくれた。

b) プログラムを実施して気づいたこと

アイスブレイクや実習の実施中、負けず嫌いな一面を見せたり、ラジカルな論法でやり方を提案したりする人もいれば、茶目っ気を発揮してはしゃぐ人や盛り上がるグループもあった。それは「話し合いといっても、発言がないかもしれない」ときいていた事前情報とは大きく異なり、どのような話し合いなのかによって、人の行動や態度、かかわり方は

大きく異なるものだというをよく表していた。ラボラトリー方式の体験学習では、あえて架空の話モチーフにした一見突飛な設定の実習を用いることが多いが、それは現実の話では引き出せない各人のありのままの行動、態度を引き出しやすくなるからである。非現実的なコンテンツだからこそ、メンバーがある意味、気を許して、あるいは童心に帰ってアイスブレイクや実習に取り組むことができ、それによってグループメンバーと有効な話し合いができれば、そうしたかかわり方はグループや自分自身に根付いていく可能性が高い。また、そういう人がグループに1人いれば、他のメンバーもその様子を見て影響を受ける。話しやすい雰囲気が連鎖的に広がり、育まれていくわけである。もしも、最初からプロジェクトの課題に即したディスカッションを行っていたら、話しやすい雰囲気を醸成することができただろうか？ それはやってみなければわからないことだが、話しやすい雰囲気をかもし出すような関係づくりに重点をおく場合、遠まわりのようでも体験学習を行うことが結果的に近道になると筆者は考える。

さらに、そうした体験を踏まえて小講義を行うことにより、講義内容が机上の話にとどまらず、各人各様に自分の体験を再解釈して検討することが可能になり、参加者は現実的な学びを得やすくなる。今回の小講義では「多様性を活かす視点を持ち、創発的な対話ができる関係づくりを促進する」というワークショップの目指す方向性に向けて、必要な視点や行動、態度とはどのようなものであるかを解説することにより、参加者各自が自らの体験をより俯瞰的、相対的に内省し、一般化する機会を提供した。

3. ダイアログ ～テーブルで、全体で、テーマについて語り合う

体験型のワークショップは、時間が延びて休憩時間が圧縮されることも珍しくないが、集中的な体験を持つとした場合、休憩時間を適正にとることは必要不可欠である。この日もランチタイムはしっかり1時間確保し、午後のプログラムに備えた。

a) プログラムの内容

午後はプロジェクトリーダー（班長）による過去3カ年の研究班の活動報告とチェンジエージェントによる海外における参加型手法を用いた共同作業の事例報告から始まり、それぞれ質疑応答も行った。その後、午前中の体験学習の実習体験と午後の報告をきく講義体験を踏まえて、こちらから少し深めの質問を行い、それに対する参加者各自の思いや考えを語り合い、きき合う「テーブルダイアログ」を行った。これは何らかの決定事項を導いたり、合意形成を図つたりするディスカッションではなく、お互いの意見をよくきいて相互理解を図ることに重点をおき、午前中、体験学習に取り組んだグループのメンバーを固定し、同じグループで行った。そうすることでグループの発達を促進でき、できるだけ率直かつ正直な対話が成される場づくりの支援になると考えたからである。テーブルダイアログの目的は、プロジェクトの現状をみんなで探求し、そこから進む方向性を見出していくためのヒントを得ることだった。ダイアログの質問は次の通りである。

問い1: これまでの話の中で、あなたが最も価値を感じたり、必要と認めたところはどこですか？

問い2: これまで聴いてきたことは、あなたにとってどんな意味をもちますか？
各自のこれまでの研究内容との関係を踏まえ、具体的に述べてください。

問い3: リスク評価指標に付け加えたいことや変更したいことを提案してください。

質問ごとに付箋紙に自分の思い・考えを個人記入する時間を5分弱とり、その後、グループで語り合い、きき合うダイアログの時間を20分弱とって、3回のセッションを行うことにした。結果的に3セッションともダイアログは盛り上がり、各30分程度の時間を要し、さらに3セッションすべてが終わった後で、出てきたすべての付箋紙の内容をグループごとに関連づけて再統合し、模造紙でいくつかの島に分けてタイトルづけを行う創造的発想法の作業を試みた。付箋紙の量がグループによってかなり違っていたが、模造紙上で付箋紙を統合していく作業は問題なく進み、グループごとのプロジェクトに対する現状認識や問題意識、今後の展望が明らかになっていった。

その後、短い休憩時間を取り、各グループのダイアログを集約したぬ内容の発表を全員で聞き、質疑応答や意見交換をする「全体ダイアログ」の機会を持った。コンテンツとプロセスが入り混じった模造紙上のマトリックスは、グループごとの観点で集約されていて興味深く、ポジティブなことばかりでなく、ネガティブな意見も表明されていた。さらに3グループ目の発表では、模造紙の最後に“YES WE CAN”と大きく書かれていて、これから始まる研究活動への前向きな気持ちが伝わってきた。

b) プログラムを実施して気づいたこと

午後最初のプロジェクトリーダー（班長）による報告後の質疑応答の際に、参加者から報告の中の一事例の数値データの数え方について質問があった。その際に、班長はデータの根拠となる数え方を説明したが、参加者はその事例を専門分野とする研究者であり、「その数え方は違います」と言って本来の数え方を述べた。すると、班長は「そうですか。いやー、僕ひとりでも何かもわかるわけではないから、みなさん、教えてください」と言ったのである。筆者は思わず、胸がいっぱいになった。これを正直で率直な態度と言わずして、何と言おうか。班長は国内最高峰の研究者の先頭に立つ人なのである。それなのにこれほど屈託なく、自分の非を認め、協力を要請するとは。研究の詳細はわからない筆者でさえも、班長の人としての素晴らしさに感動した。おそらくあの瞬間、参加者の意識や気持ちは大きく揺れたことだろう。体験学習の実習を通じて、午前中に体験した「各自が自分の情報を提供しあい、グループとして問題解決に挑み、成果を上げる」という行動が、本当にこれから始まるのだという実感が湧いたのではないかと思う。

次にチェンジエージェントが報告した海外の参加型手法の事例は、具体的でわかりやすく、多くの人が協力し合い、どのように結果を出していくのかという過程が見えるものだった。個人研究センターに活動している研究者にとっては、知の広がりや社会的な知の活かし方の一例を見た思いだったのではないだろうか。プロジェクトの今後の具体的活動を示唆する発表だったといえる。

テーブルダイアログはどのグループも沈黙することなく、語りは切れ目なく続いた。そして、班長の所属していたグループは特に使用した付箋紙の量が多く、メンバー各人の語

りも熱を帯びていた。年代的には比較的年配の研究者が多く見えたので、その展開は意外だった。模造紙に意見を集約した後の発表をきいてわかったことだが、1グループは「コア」と名づけた島に「班長という大リーダーの存在価値」という付箋や「多様性」「協働できる条件を探ること」といった付箋があり、コンテンツレベル（課題・内容レベル）の気づきや指摘を挙げながらも、プロセス（人と人との関係的過程）を中核に位置づけて語っていた。2グループの「異分野統合 Positive 型」と名づけられた島には、「異分野の専門家が協働する必要があるとわかった」といった趣旨の付箋が何枚もあり、そのうちの2枚が気づきの根拠として、グループワーク（実習）での体験を挙げていた。それには、体験学習の実習が持つメッセージの強さを改めて感じた。さらに3グループの「この研究班のいいところ」という島には、「今回の場が異なる専門家が、気楽な場で、でも大きなひとつの目標に対して話し合う機会になること」という付箋があった。この段階で、本ミーティングの目指す方向性は、参加者に体験的に理解されていたように思え、うれしかった。また、コンテンツレベルで見れば、3つ目の質問に関する意見・提案はかなり多く出されており、今後の実践課題も既に見えてきているように思えた。

4. 本日の活動をふりかえって ～ふりかえり、わかちあい

a) プログラムの内容

体験学習では実習後、参加者はファシリテーターが用意した「ふりかえり用紙」への記入を通じて、自分の体験をふりかえり、感じたこと、気づいたことを明らかにしていく。そして記入後は、グループで各自がふりかえり用紙に書いたことをわかちあい、お互いの感じたことや気づいたことを共有して、学びを得ていく。そうした構造を本ワークショップにも取り入れ、ダイアログ終了後には、この日朝からの活動全体をふりかえって記入するふりかえり用紙を配布した。記入時間は15分弱しかなかったが、続いて休憩時間を10分とって書き終わらない人は引き続き記入できるようにした。すると、休憩時間になっても書いていた人が何人もいた。午後はさまざまな局面で時間延長していたことから、休憩時間終了時に16時50分くらいになり、それからわかちあいをすると明らかに終了時刻の17時を過ぎることがわかった。そこで、休憩を終えた後はその旨を参加者に伝え、「お急ぎの方はここで帰られても結構です」とアナウンスした。しかし、帰る気配を見せた人は一人もおらず、全員が会場に残った。そして最後のふりかえりは、みんなで輪になって座り、時間の都合でふりかえり用紙の内容すべてをわかちあうことは難しかったため、一人一言ずつコメントすることにした。そこで出てきたコメントから、印象的な言葉を抜き出すと次の通りである。

【参加者の声・反応】

- ・今までのプロジェクトとは違うことがわかった。このプロジェクトなら、何かできる気がする。
- ・いろんな専門家がいるなかで、自分にしかできないことを見つけてやっていきたい。

- ・今までプロジェクトでは頼まれたことをやるのが仕事だと思っていたが、今回のワークショップで自分も何をやるかを定める一員なのだった。
- ・いつもにぎやかな自分がこんなに人の話をきいたのは初めて。みなさんのことがよくわかった。
- ・自分の専門からの視点を活かして、参考になりそうなことはどんどん提案します。
- ・簡単にみんなに連絡をとれるしくみが欲しい。

このときのメンバーの発言を記録担当者が記録していたが、それを見ると、上記の内容は書かれておらず、コンテンツレベルの内容がズラリと並んでいる。きき方によって捉える内容が異なるので、メンバーにとって筆者が書き出した上記の実感がどこまで強く残っているかはわからない。ただ、こうした発言を次々にきくことで、筆者はプロジェクトの雰囲気や関係性が変わってきていることを実感した。

b) プログラムを実施して気づいたこと

時間延長が明らかになっても帰る人なく、みんなで輪になって語り合えた最後のわかちあいは、筆者にとって心温まるものだった。誰もが「今、こう思っている」「今日、こんなふう感じた」「これから先はこうしていきたい」等、自分の意思や感覚、希望を素直に表現し、コンテンツレベルのことについては反省も交えて今後の課題を提示する人が多かった。本ワークショップの依頼をチェンジエージェントから受け、プランニングを進める段階で筆者が不安に思ったのは、このプロジェクトの研究内容を正確に理解することが、筆者には困難だったことである。実際、準備期間中にはプロジェクトリーダー(班長)の論文やチェンジエージェントが海外で行ったワークショップの資料等を送ってもらったが、論文は日本語だったが専門的であり、資料は英語だったので理解の度合いに自信が持てなかった。「参加対象者の課題(コンテンツ)を正しく理解しないで、適切な介入ができるのか」。これは筆者にとって、当日まで懸案材料として残っていた。しかし、最後のわかちあいで語られた参加者の発言をきくうちに、それは杞憂に過ぎなかったと感じた。コンテンツの正確な理解ができていれば、それに越したことはない。けれど、たとえコンテンツを100%正確に理解できていなくても、その発言が出てきた文脈や背景を察知していて、語り手の意図や気持ちを理解できていれば、受容・承認・介入といった一連の支援行動は可能であると思ったからである。それは言い換えれば、コンテンツ(課題・内容)についていけない部分があっても、プロセス(人と人との関係的過程)が見えていれば、支援することは可能だということである。確かな根拠を提示できるわけではなく、参加者に恵まれていたからこそ、そうした解釈につながったのかもしれないが、それは筆者にとって心強く、ファシリテーターという存在の可能性の広がりを感じた。

5. 終わりに

本ワークショップは最終的に全員の拍手のもと、幕を閉じることができ、その後もプロジェクトの活動は順調に続いている。行動や態度を変えようとするとき、「何のために何を

すればよいのか」というコンテンツにばかり目がいきがちだが、実際は何をするか以前に、「どのように行動したいのか、どのような関係でありたいのか」といったプロセスレベルで必要と思われる行動を試してみれば、そこからわかることや変容していくことがある。体験学習の実習とは、そうした行動やかかわりを試すことができるツールなのである。そして、体験学習の実習を通じて、自分たちが求める行動やかかわりを試した人たちは、その後、仕事上のコンテンツを交えたダイアログを行う場合にも、望ましい行動や態度、かかわりの維持に努めていくことが比較的容易である。おそらくダイアログではなく、ディスカッションやディベートとなると、コンテンツの当事者性が高く、葛藤が起こりやすい分、望ましい行動や態度、かかわりの維持は困難な場合もあるだろうが、それでも後にふりかえり、わかちあいを交えて、それ自体を体験学習とみなす位置づけにすることで、各自が自らの状況を内省し、次に活かすことができる。本ワークショップの経験を通じて、試すこと、実際にやってみるものの重要性を改めて認識し、そうした体験を内省することにより、道は開けると思った。

本ワークショップは高度専門家集団である研究班を対象にしていたが、同様の考え方で企業の事業活動を行うプロジェクトや地域活動のプロジェクト等に幅広く応用可能である。活動の起点や転機に、そのプロジェクトが目指す方向性に応じたワークショップをデザインし、実施することによって、メンバーやグループの活性化、目指す方向性の浸透が図れる。その際には、体験学習を教育や研修の手法として独立的に扱うだけでなく、体験学習の学び方をより一層、日常に取り入れやすくするために、本事例のように現実のコンテンツを交えた構成的なダイアログをプログラムに導入することを提案する。

〔引用文献〕

Wheatley, M. J. 2005 Introduction : The World Café ~Shaping Our Futures Through Conversations That Matter~ Berrett-Koehler Publishers, Inc. San Francisco, C.A.
(香取一昭・川口大輔 共訳 2007 まえがき : ワールド・カフェ ~カフェ的会話が未来をつくる ヒューマンバリュー viii)

〔参考文献〕

Brown, J. with Isaacs, D. and the World Café Community 2005 The World Café ~Shaping Our Futures Through Conversations That Matter~ Berrett-Koehler Publishers, Inc. San Francisco, C. A. (香取一昭・川口大輔 共訳 2007 ワールド・カフェ ~カフェ的会話が未来をつくる ヒューマンバリュー)

Rogers, C. R. Freedom to Learn / ※原著は2nd ed. ただし、現状は3rd ed.のみ。詳細不明 (伊東 博 監訳 1984 人間中心の教師 岩崎学術出版社)

添付資料 VI 第2回ワークショップにおける門平の報告

ランキングとリスク管理

平成22年1月7日
帯広畜産大学・門平達代

H20 検討結果+H21の追加検討

Zoonosis	Final point
TSE (vCJD/BSE)	5
Q fever, Lysteria virus infection, Echinococcosis	4
Typhoid, measles, H5N1, H7N9, HFRS, B virus disease, LCM, Teledysentery disease, Paratuberculosis	3
Swine hemorrhagic fever, Marburg disease, Crimean-Congo hemorrhagic fever, Tick borne encephalitis, Plague, Japanese encephalitis, Campylobacter infection, Anthrax, Japanese spotted fever, Q fever, Botulism disease, Anisakiasis, Raccoon larva migration, Echinococcosis E. coli(O157)	2
Eastern equine encephalitis, South American hemorrhagic fever, Japan virus infection, HPS, Glanders, Marburg disease, Rocky mountain spotted fever, Chagas disease (American trypanosomiasis), Hendra virus infection, Varicella infection, Surra infection, Agalaxia mycobacterium infection, Brucellosis, Leptospirosis, Trichinellosis, Amebiasis, Singopterygiosis	1
Venezuelan equine encephalitis, Recurrent fever, rat bite fever, West Nile fever, Dengue fever, Erythema infectiosum, Yersinia pseudotuberculosis O fever, Cryptosporidiosis, Salmonella infection, Pasteurellosis, Ascariasis, Toxoplasmosis, Typhoid, TD, Nipahvirus infection, Babesiosis, Cryptosporidiosis	0
Plague, Omsk hemorrhagic fever, Kyasanur forest disease, Lassa fever, Rift valley fever, Yellow fever, Tularemia, Lyme disease, Legionellosis, Cryptosporidiosis, Fasciolosis, Cryptosporidiosis, Giardiasis, Schistosomiasis, Paragonimiasis, Babesiosis	-1
Western equine encephalitis, Chikungunya, Vesicular stomatitis, Leishmaniasis, Coccioidiomyces, Histoplasmosis, Fungal infection, Listeriosis, Onchocerciasis, Hook worm disease, Sporangiosis, Diphyllobothriasis	-2
ICD, Strongyloidiasis, Malaria, Toxocara	-3
Asian tapeworm infection, Trachoma	-4

Element of zoonosis risk profiling (102 validated)

H19 専門家アンケート結果

No	アンケート	順位
A-07	豚コレラ(送付検体)	1
A-19	輸入肉(検体)	2
B-07	豚コレラ(検体)	3
B-14	豚コレラ(検体)	4
A-02	豚コレラ(検体)	5
A-14	豚コレラ(検体)	6
C-07	豚コレラ(検体)	7
D-01	豚コレラ(検体)	8
B-09	豚コレラ(検体)	9
B-16	豚コレラ(検体)	10
C-02	豚コレラ(検体)	11
A-20	豚コレラ(検体)	12
A-04	豚コレラ(検体)	13
A-11	豚コレラ(検体)	14
A-01	豚コレラ(検体)	15
E-10	豚コレラ(検体)	16
A-20	豚コレラ(検体)	17
B-21	豚コレラ(検体)	18
B-22	豚コレラ(検体)	19
B-23	豚コレラ(検体)	20
A-01	豚コレラ(検体)	21
A-01	豚コレラ(検体)	22
D-02	豚コレラ(検体)	23
D-20	豚コレラ(検体)	24
D-14	豚コレラ(検体)	25
B-21	豚コレラ(検体)	26
B-22	豚コレラ(検体)	27
B-23	豚コレラ(検体)	28
B-24	豚コレラ(検体)	29
B-25	豚コレラ(検体)	30

Element of zoonosis risk profiling (102 validated)

海外より国内へ侵入する確率

Outbreak Frequency	Probability of Entry
Score Description	Score Description
0 1/3 years	0.8 Extremely likely to enter
-1 1/10 years	0.6 Moderately likely to enter
-2 1/100 years	0.4 Moderately unlikely to enter
(divide pathogens scored -2 into moderately unlikely and extremely unlikely to enter)	0.2 Extremely unlikely to enter

感染可能人数 スタートポイント

Number of infected cases		Likelihood of spread	
Score	Description	Score	Description
5	> 13,000,000	4	Extremely likely to spread
4	1,300,000 - 13,000,000	4	
3	130,000 - 1,300,000	3	Moderately likely to spread
2	130 - 130,000	2	Moderately unlikely to spread
1	< 130	1	Extremely unlikely to spread
0	Not in Japan		Score separately as described before

重篤度

Mortality Level		Consequence of Spread	
Score	Criteria	Score	Criteria
2	> 10%	4	Severe disease with a high mortality risk
1	1 - 10%		
0	0.1 - 1%	3	Severe disease with a low mortality risk
-1	< 0.1%		
-2	No mortality	2	Moderate-to-severe disease with no mortality
		1	Mild to moderate disease with no mortality
-3	No clinical disease	0	No clinical disease

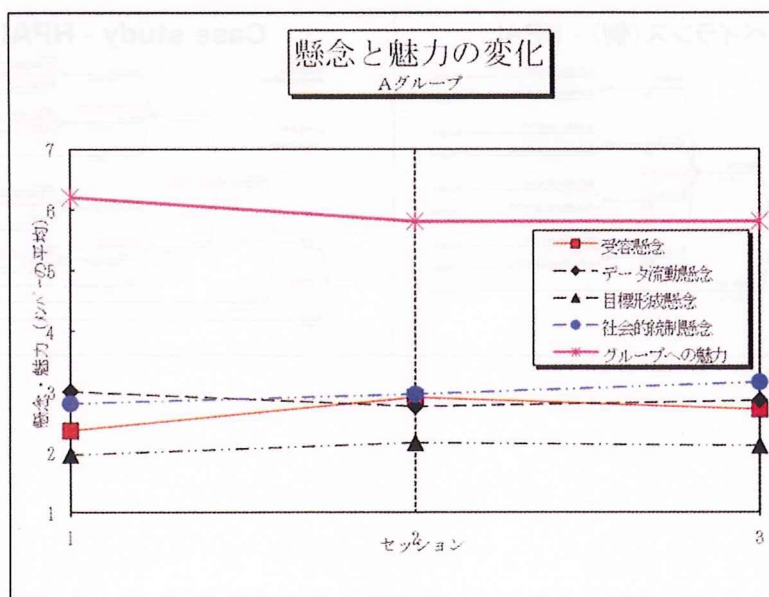
添付資料 動物由来病原体のリスクを探るワークショップ2回目を終えて

ワークショップとは、見るだけ、きくだけではなく、自らその場に参加して、他の参加者と共に考え、行動する体験型の集いである。

本ワークショップは、厚労省の要請により誕生した第一線の研究者による研究班を対象に、2009年6月、2010年1月の2回開催した。研究班には参加型疫学の研究者がおり、その方と連携して、ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係トレーニングをベースにおき、メンバー各自の主体性を尊重して、各自の知識、能力を十分に活かし合えるチームづくりを促進した。

このワークショップの特長は、ラボラトリー方式の体験学習の構成的な実習を午前中に行い、ふりかえり、わかちあいを通じて、メンバー間の対話と相互作用を促進し、午後は午前中の学びを活かして、研究に対する考え方や研究内容の枠組みについて話し合う実践的な対話の場にしたことである。終了時には、一日をふりかえり、わかちあうために全員で輪になって話し合う場を持ち、現実の研究を話題にした午後の話し合いも含めて、プログラム全体を体験学習として構成した。

2回目のワークショップでは、メンバー各自が感じる「グループへ懸念と魅力」を質問紙調査により探ってみたところ、別紙の通り、人間関係トレーニングを行った午前中と、ほとんど変わらぬ水準で終了時まで懸念は低め、魅力は高めで推移していたことがわかった。一般的に、人間関係トレーニングのときは懸念が低く、魅力は高めでも、現実の仕事となるとそうはいかないことが多い。しかし、このワークショップでは午前、午後と続けて同じ場所で、人間関係トレーニングから現実の研究の話し合いへとシフトしたため、話し合いやすい関係や雰囲気が継続していったものと思われる。



また、2回目のワークショップではグラフィック・ファシリテーターを交えて、小講義やプレゼンテーション、話し合い等、その日のすべての出来事をグラフィック・レコードとして残してもらい、その報告をメンバー全員できく時間も設けた。研究者ではなく一般人であるグラフィック・ファシリテーターが描いた絵とその報告は、多くのメンバーに強い影響を与え、一般人へのリスクコミュニケーションの重要性を改めて喚起する契機にもなった。

このようなプログラムを実践したことにより、メンバーは話し合いの内容だけでなく、お互いに協働可能な関係に変化しつつあることを実感し、それまでの班長集約型の指示的研究スタイルから、全員参加型の主体的研究スタイルへの変容をイメージすることが可能になった。こうした研究スタイルは、参加型疫学の実践に欠かせないものである。

さらに、研究内容に関しても、メンバー各自が専門性を活かしたアプローチを実施することで、類を見ないリスクプロファイルの評価方法をつくることが可能ではないかという見方が研究班に生まれ、そのための具体的な提言や要望等も話し合いの場やアンケートで、メンバー自身の意見として語られていた。

全2回のワークショップを通じて、研究班は「研究者のグループ」から「研究チーム」へと変容しつつある。参加型疫学の研究者によるワークショップのコーディネートが功を奏し、人間関係トレーニングの実践と理論がメンバー各自に受容されて、チーム・ビルディングが実際に進行したといえよう。

2010.1.7 人間関係トレーニング終了後

他人の意見・考えを聞いて、その上で自分の意見を述べるように意識することが私にとっ
ては大切で、そのくらいで十分考えは伝わる。

ほかの人の評価と自分の目指すところがまっ
たく異なるので困ったが、いつものことなの
で仕方がない。

自分への気づき

少数派でも十分に意見を聞く
とともに尊重する必要がある。

自分の考えを他の人に沿わ
せていく重要性（自分が正し
いという思い込みの危険性）

話し合いへの気づき

いろいろな意見を聞くだけでは
まとまりのない話し合いになり
がちだが、誰かがまとめ役にな
るとうまく話が進むのではない

初めて会う人、初めて議論する人
とも濃密な議論をすること。結論
を導き、その過程で新たな視点を
広げることの楽しさに気付いた。

よく人の意見を聞くこと。自己が考
えも及ばないことを人それぞれい
ろいろな立場で考えていること。

グループへの気づき

意見が幅広いということ。自分
の思わない仮説が出たこと。

研究者中心だけあって、それぞ
れ理由がはつきりしている。

結論を出すことが重要か、結論を
出すまでのプロセスが重要か。

話し合いへの疑問

人間関係
トレーニングへの評価

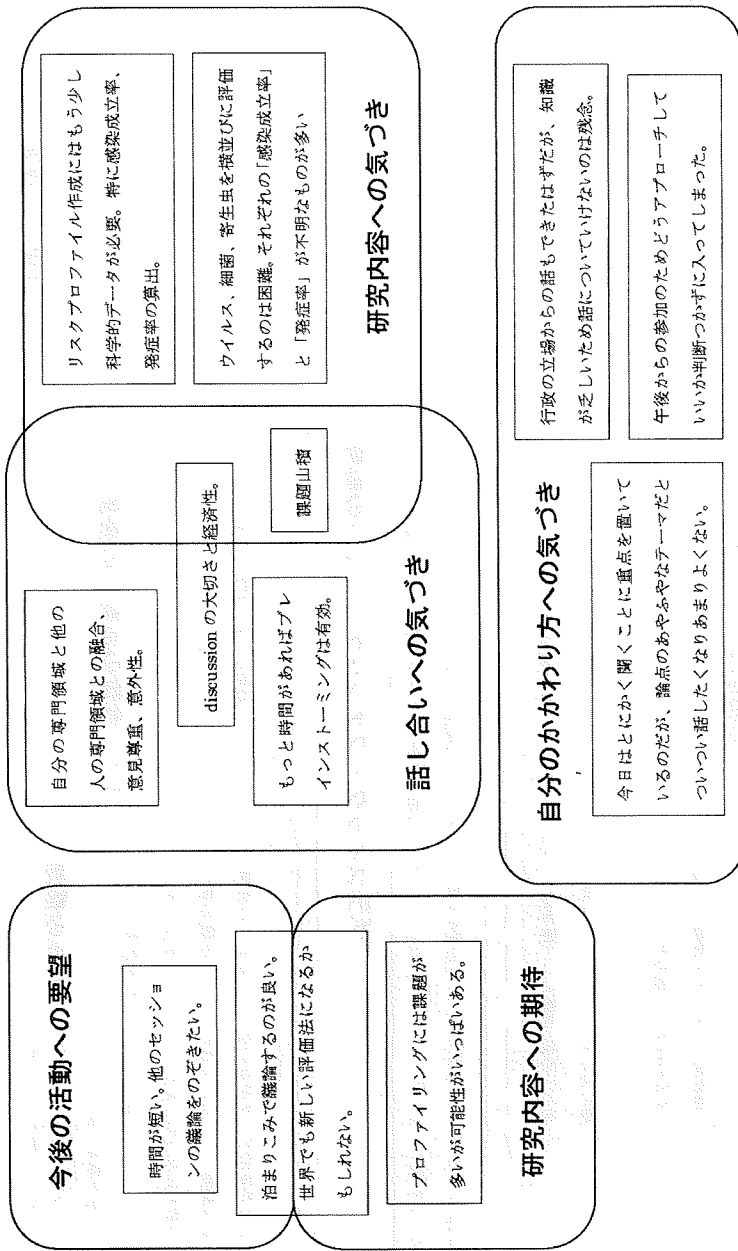
プロジェクトの立ち上げや組織の定期的な点検に
はこのようなトレーニングが有効ではないか。

繰り返して体験することが大切。ゲーム的な楽しみがあり、
人間関係という学習だけではない点が良い（教材のよさ）

「自己覚知と他者承認」が同
一となることの大切さを知っ
て努力したいと思った。

今後の行動目標

2010.1.7 専門別ディスカッション終了後



グラフィック・ファシリテーションへの評価

短期間にいろいろと理解して絵にするのはすごい能力だと思った。

絵の力はすごい。ポイントを押さえてあって感動、素晴らしい議事録でした。

人間は視覚動物であることをつくづく感じました。

ビジュアルの有効性を実感した。

図形による議事録は印象が強い。

graphicに彼女個人の意見等を入れる必要があるのか？客観的に描くだけでいいのではないか。

ポストターの関連の内容に注目が行き過ぎて、その前の門平さんの発表が薄まったのは残念。

まだ具体的データがないまままで議論しているのだから放しになってしまおう。

内容が豊富・濃い
(→少し疲れてきた)。

今までの問題点と今後必要なことが少し見えてきたような。

WSの感想

グラフィック・ファシリテーションの影響

GF報告後の気づき・リスクコミュニケーション探究の萌芽

一般の人々に情報をどう伝えるかという技術・方法について考えさせられた。

一般の人の考えがよく分かった。

一般の人に対する感染症のリスクコミュニケーションが非常に重要である。

リスクリストに「現時点での信憑性」という欄があってもいいかも。

いろいろな方の持っている知識を集めて、より良いものを作ることが重要である。

今後への提言

合宿など長い時間が必要。もっと話し合いを。

今後の活動への要望

3. 侵入・不許可動物等の公衆衛生リスク評価と管理に関する研究

研究分担者	井上 智	国立感染症研究所・獣医科学部、室長
研究協力者	浦口宏二	北海道立衛生研究所・生物科学部衛生動物科、 研究主査
	深瀬 徹	明治薬科大学・薬学教育研究センター・基礎生物学部、 准教授
	佐藤 克	狂犬病臨床研究会、会長（佐藤獣医科病院・院長、 国立感染症研究所・獣医科学部、客員研究員）
	野口 章	国立感染症研究所・獣医科学部、主任研究官
	村山悠子	さいたま市動物愛護ふれあいセンター、愛護指導係
	横山敦志	北海道保健福祉部保健医療局・健康安全室、主幹
	梅澤めぐみ	根室保健福祉事務所保健福祉部・生活衛生課、主査
	宗村佳子	東京都動物愛護相談センター城南島出張所、 安全対策担当係長
	沼田一三	兵庫県動物愛護センター、所長
	久本千絵	兵庫県動物愛護センター三木支所、主査
	西條和芳	徳島県保健福祉部生活衛生課、技術課長補佐
	魚住佳世	徳島県動物愛護管理センター、技師
	川越辰也	宮崎県衛生管理課、乳肉衛生担当
	坊菌慶信	宮崎県都城保健所衛生環境課、主査
	佐野哲也	滋賀県健康福祉部生活衛生課・食の安全推進室
	松本尚美	鳥取県生活環境部・衛生環境研究所、特別研究員
	Veera Tepsu Methanon	タイ赤十字サオパー王女記念研究所・狂犬病診断部、 部長

研究要旨 本分担研究は、「侵入・不許可動物等の公衆衛生リスク評価と管理に関する研究」を行い、不法上陸犬や輸入コンテナ貨物に迷入した動物による狂犬病等の感染症リスクを低減して、その結果に基づいて特に注意すべき感染症を想定した動物の対応について提言を行うことが目的である。初年度（平成21年度（2009））は、（1）海外における狂犬病罹患動物の不法侵入事例および我が国の関連情報等の分析、（2）狂犬病の発生を想定した机上訓練の実際と課題の検討（我が国に必要な狂犬病サーベイランス）、（3）外国犬不法上陸防止等に関わる課題分析（北海道 根室・網走における不法上陸犬等の実態調査）を行い、（4）タイの赤十字研究所狂犬病診断部の研究協力により、狂犬病が疑われた動物を臨床判断する方法を我が国に導入して狂犬病の臨床サーベイランスの確立を検証することを可能にした。

A. 研究目的

本分担研究では、「侵入・不許可動物等の公衆衛生リスク評価と管理に関する研究」を

(a) 輸入動物由来感染症を含めたリスクプロファイル案に基づく動物由来感染症のサーベイランス計画の作成、(b) 輸入動物・野生動物、侵入動物と不法に持ち込まれる動物、伴侶動物・展示動物の試行的サーベイランス、

(c) サーベイランスデータに基づく適正な管理措置の在り方の研究を行い、不法上陸犬や輸入コンテナ貨物に迷入した動物による狂犬病等の感染症リスクについて低減を行い、その結果に基づいて特に注意すべき感染症を想定した動物の対応について提言を行うことが目的である。

B. 研究方法

初年度（平成 21 年度）は、狂犬病を当該モデル感染症として我が国への輸入狂犬病のリスク調査・分析と、これに備える対策の現状把握、サーベイランス方法の確立に関わる情報の収集とその分析・調査方法等について検討を行った。

- (1) 海外における狂犬病罹患動物の不法侵入事例および我が国の関連情報等の分析
- (2) 狂犬病の発生を想定した机上訓練の実際と課題（我が国に必要な狂犬病サーベイランスを考える）
- (3) 外国犬不法上陸防止等に関わる課題分析（北海道 根室・網走における不法上陸犬等の実態調査）
- (4) 狂犬病のサーベイランスを確立するために必要な疑い動物の臨床判断法の確立に関する研究

C. 研究結果

(1) 海外における狂犬病罹患動物の不法侵入事例および我が国の関連情報等の分析

海外では、狂犬病流行地域から狂犬病罹患動物が輸入される事例がしばしば報告されている。「ProMED-mail」等に報告された平成 19 年（2007）と平成 20 年（2008）の事例を図 1 に示した。いずれも、検疫の隙間をすり抜けて発生した事例である。フランスで平成 20 年（2008）に起きた輸入事例（図 2）とアメリカで起きた輸入事例（図 3）について経緯と概要を示した。我が国で狂犬病が疑われるイヌ等の侵入経路と対応策を考えるうえで有益な情報である。

我が国と同様に狂犬病清浄国であるハワイ州でも、平成 13 年（1991）に狂犬病に罹患したコウモリがコンテナ船に紛れ込んであわや上陸といった事例が報告されている（図 4）。ハワイ州で準備されていた狂犬病対策ガイドライン（Rabies contingency plan）による係官の適切で迅速な対応が発生阻止を可能にしたといえる。また、コンテナ船等を介した野生動物等の移動がしばしば起きていることも元米国 CDC の担当者から報告されている（図 4、下段に記載）。

我が国では、平成 13 年（2001）にハワイ州のガイドライン等を参考にして「狂犬病対応ガイドライン 2001」が作成されているが、「我が国における狂犬病予防対策の有効性評価に関する研究（平成 16 年（2004））」で各自治体における狂犬病に対する危機意識と発生を想定した危機管理等の課題点が指摘さ

れている。

我が国では、動物等による輸入狂犬病は幸いにまだ報告されていないが、平成19年(2007)にはヒトの輸入狂犬病が同時に2例も発生している。詳細については、国立感染症研究所ホームページ(IASR v28 325:狂犬病 2006年 現在)を参考にされたい(図5)。担当医師による情報提供から、実験室内診断、国内外の狂犬病の現状、行政対応等について当時の状況が詳しく記載されている。担当医師が狂犬病を疑ってから国立感染症研究所に行政検査が依頼されて狂犬病が確定されるまで関係部局間での連携と対応は「狂犬病対応ガイドライン 2001」が大きく寄与したと考えられた。

社会的に大きなインパクトのある希少な感染症では事前対応型の危機管理が重要であることが理解できる。特に、医師等(疑い動物においては獣医師)が臨床経験の無い感染症の臨床診断は容易でない事が改めて認識され、希少かつ重要な感染症で臨床の現場(医師・獣医師)で経験される類似疾患に対する鑑別診断が常に行われる仕組み(啓発・研修等)の構築が重要であると考えられた。

狂犬病は、発生が疑われただけでも大きな社会的不安を引き起こすことがあり、ハワイ州で昭和42年(1967)に経験されている(図6)。このときの経験に基づいてハワイ州の狂犬病対策ガイドラインは作成されている。ガイドラインの有効性は理解される場所であるが、現場の担当者がガイドラインの目的と意義を十分に理解して発生以前に具体的な役割分担(図7)と関係部局との連携(図8)を事前準備(危機管理)しておくことが肝要と考えられた。

近年、我が国同様に狂犬病清浄国である隣国の台湾で狂犬病の国境における侵入対策のリスクモデルに関する論文(H-Y, Wng, et al. A quantitative risk assessment model to evaluate effective border control measures for rabies prevention. Vet. Res 41:11)が報告された。中国における近年の狂犬病流行拡大を懸念してリスク評価が行われたと考えられる。前記、フランス等での不法(密輸)事例への対策に大きな課題が残されているとしている。

(2) 狂犬病の発生を想定した机上訓練の実際と課題(我が国に必要な狂犬病サーベイランスを考える)

狂犬病の発生を想定した自治体における取り組みとして、岩手県で行われた危機管理研修(狂犬病対策のための効果的な啓発活動のありかた)を平成18年(2006)の「厚生労働科学研究:動物由来感染症のサーベイランス手法の開発に関する研究」で取り上げた。

研修の総括報告は、前記研究報告書および衛生微生物技術協議会第28回研究会(平成19年7月6日、岡山県環境保健センター)で配布した資料集に掲載した。研修では、自治体の枠組みを超えて対策に携わる自治体(県)の担当者、臨床獣医師が意見交換を行い、互いの地域特性を認識して対策の課題を効果的・効率的に情報共有することが可能となったことから、関係機関での連携推進が重要であると報告している。

近年、危機管理研修による自治体担当者の意識啓発に続いて、狂犬病の発生を想定した机上訓練と実技を組み